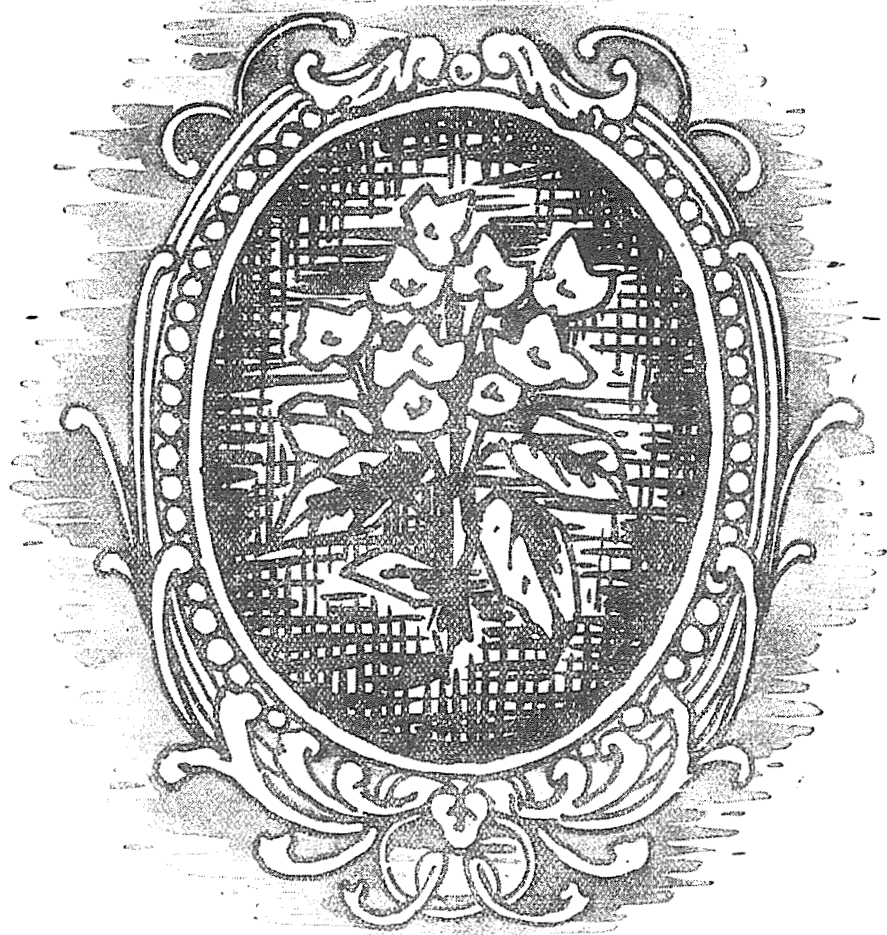


西大醫學報

第七十七號

昭和十五年三月



關西大學醫學報發行

大阪商科大学 教授 陶山誠太郎 著

新刊

軍需品工場の原價計算

菊 三 判 上 製
 料 價 二 百 八 十 錢
 送 料 十 四 錢
 圖 書 式 數 十 種
 解 約 十 種

經濟統制と計算的秩序とが不可分の關係にあることは議論の餘地がない程である。来る七月一日より陸軍軍需品工場に對し、陸軍省令に依る原價計算要綱を強行して、適正なる調辨價格を求めんとする。著者は斯界の一權威者なり。茲に軍需工場の爲に要綱を中心として獨自の解説を試む請ふ閣下あらんことを。

本書の内容

はしがき 第一、原價計算を行はざる工業會社の會計は信頼し得るや A、商業會計と工業會計との相異 B、工業會計に於て損益計算を行はんとせば製品、仕掛品の原價計算は絶対に必要なり
 第二、統一原價計算制度 A、業種別統一原價計算制度 B、陸軍軍需品工場事業場原價計算要綱は統一原價計算制度ではない、附「要綱」の補昭權認容條項に付いて C、個別軍需工場の原價計算準則又は原價計算便覽
 第三、原價計算の二方法 A、原價計算とは何ぞや B、個別原價計算方法、附勘定組織 C、綜合原價計算方法、附勘定組織
 第四、原價の構成要素 A、原價種類 B、製造原價要素 C、一般管理及販賣要素 D、非原價項目
 第五、記帳手續 A、材料仕入記帳手續 B、材料の消費計算記帳手續 C、貸金計算記帳手續 D、經費計算記帳手續 E、原價計算記帳手續 F、一般管理費及販賣費計算記帳手續 C、貸金計算記帳手續 D、經費計算記帳手續
 第六、諸帳簿書類及様式 附録 一、米國工具製造組合の統一原價計算便覽に於ける諸表、二、陸軍軍需品工場事業場原價計算要綱 三、海軍軍需品工場事業場原價計算準則案

陶山教授著

會 計 學	定 價 二 圓 十 錢
會 計 監 查 總 論	送 料 十 圓 十 錢
企 業 豫 算 統 制 と 標 準 原 價 計 算	定 價 十 圓 十 錢
經 營 の 分 析 と 合 併 に 於 け る 諸 計 算	送 料 十 圓 十 錢

大 阪 道 新 田 梅 區 北 阪 大 振
 替 話 電 番 番 番 番 番 番 番
 二 七 九 三 一 一 一 一 一
 三 五 六 七 五 一 一 一 一
 三 三 二 五 七 一 一 一 一

大 同 書 院

東 京 駿 河 臺 中 央 大 學 前
 振 替 電 話 番 番 番 番 番 番 番
 八 三 二 一 八 三 二 一 八 三 二 一

詔書

朕惟フニ神武天皇惟神ノ大道ニ遵ヒ一系無窮ノ寶祚ヲ繼ギ萬世不易ノ丕基ヲ定メ以テ天業ヲ經綸シタマヘリ歷朝相承ケ上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ボシ下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉ジ君民一體以テ朕ガ世ニ速ビ茲ニ紀元二千六百年ヲ迎フ今ヤ非常ノ世局ニ際シ斯ノ紀元ノ佳節ニ當ル爾臣民宜シク思フ神武天皇ノ創業ニ騁セ皇圖ノ宏遠ニシテ皇謨ノ雄深ナルヲ念ヒ和衷戮力益々國體ノ精華ヲ發揮シ以テ時艱ノ克服ヲ致シ以テ國威ノ昂揚ニ勗メ祖宗ノ神靈ニ對ヘンコトヲ期スベシ

御名御璽

昭和十五年二月十一日

各 大臣 副 署

內閣告諭

紀元二千六百年ノ佳節ニ方リ 聖慮宏遠畏クモ優渥ナル詔書ヲ渙發セラレ臣民翼贊ノ道ヲ昭示シ給ヘリ眞ニ恐懼感激ニ堪ヘズ恭シク惟フニ 神武天皇惟神ノ大道ニ遵ヒ一系無窮ノ寶祚ヲ繼ギ萬世不易ノ丕基ヲ定メ以テ天業ヲ經綸シタマヒテヨリ皇統連續茲ニ二千六百年歷朝蒼生ヲ惠撫慈養シタマヒ臣民相率キテ盡忠報國ノ誠ヲ效シ皇基彌々堅ク寶祚益々隆ニシテ以テ今日ニ及ビ國史ノ成跡炳乎トシテ宇内ニ輝ク誰カ生ヲ神洲ニ享ケタルノ光榮ニ感激シ挺身以テ臣節ヲ盡シ國家ノ興隆國威ノ宣揚ニ勉メザラン

今ヤ帝國ハ東亞新秩序建設ノ偉業ニ邁進シツツアリ事變勃發以來既ニ二年有半外出征將兵ノ勇戰奮闘ト内銃後國民ノ奉公效誠トニ依リ着々戰果ヲ收メ東亞ノ安定日支ノ提携將ニ其ノ緒ニ就カントス然リト雖國際情勢複雜ヲ極ムルノ時ニ當リ帝國遠大ノ理想達成ノ爲ニハ尙前途幾多難關ノ存スルヲ覺悟セザルベカラズ此ノ秋ニ當リ我國民ハ一ニ 聖旨ニ恪遵シ一億一心和衷戮力各々其ノ業務ニ精勵シ嚴ニ荒怠ヲ戒メ質實剛健克ク百艱ヲ排シ萬苦ニ堪ヘ以テ國家興隆ノ成果ヲ擧グルヲ期セザルベカラズ是レ皆天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼シ奉ル臣民輔翼ノ大義ニシテ又以テ我等ノ祖先ノ遺風ヲ顯彰スル所以ナリ

本日圖ラズモ大詔ヲ拜ス全國民須ク決意ヲ新ニシ同心協力以テ聖旨ニ副ヒ奉ルベシ

昭和十五年二月十一日

內閣總理大臣 米 內 光 政

世界屋棟的帕米爾

教授 中村良之助

清光緒三十二年至三十四年三年間經濟博士考察
總約略明白自他的大勢。今將海氏在日本地理協會的演
講錄之如左。

中央亞細亞、實是世界最高峻的地方、諸大山脈、高
聳雲霄、連互重疊、由所稱世界屋棟的帕米爾高地、
如伸五指而發於四方……………

アジア地圖を眺めるなら、印度、新疆、ソビエト中
亞領の交界地帯に斷然褐色の濃い山地を發見するであ
らう。これが「世界屋棟的帕米爾」なんである。地貌
の形容として此「世界の屋根パミール」なる表現程簡
勁に且直感的なるものは稀だらう。然しこれだけでは
其具體的内容に至つては詳しく知る由も無からう。

凡そ商品的産物や儲かる産業への、日先の御用を仰
せつかる地理を考へる手輩と其「心根」では此「屋根」
「屋棟的」の意味は白髪三千丈と同列のもの。況んや
峻嶽重疊だの「千古不滅の白體々たる秀峯」だのいひ
出せば愈々支那芝居のセリフよろしき所か一笑に附
し去られやう。だが、ソビエト式の宣傳にして次の
様だつたら一體如何なるものか。

「流域及山麓の上壤はレッス地で非常に肥沃であり
農業に有利である。タヂキスタンには發電所、工業及

農業の爲に莫大な動力資源の埋藏がある。石油及石
炭の埋藏がある。」

「第二次五ヶ年計畫に於いてタヂツク共和国はエチ
プト棉の生産の點で基本的な共和国として、カラ・
マサル産地とチルク發電所に基く有色金屬生産の
點で聯邦の基本的地方として乗出すだらう。モスク
ワ教育學研究所B・Mセテューコフ編、經濟地理研
究會譯「ソビエトロシア經濟地理」…叢文圖版二
八六、二八六頁より

平竹傳三氏の「聯戰時經濟地理」中の「タヂツク社
會主義ソビエト共和國」の條項を参照すると右の抜
書が全然宣傳「物語」に終り相でない事は、此の「世
界屋棟的高地「山嶽重疊」等といふ支那式形容と好對
照をして稍具體的に乘數等を記載してゐる。東亞の社
會に指導的關係をもつ日本と日本人は果して其何れを
採るべきやは餘程慎重且つ、敏感なるを要する。つま
り「世界の屋根」に對する「心根」此處にアジア内陸
の防共の「尾根」とする程の用心が切望される。パミ
ールを以て其地理を代表されるタヂツク共和国に對す
る正しき理解の便に大竹氏の著書を讀りと

「これ等「農耕的條件」はウウベック・トルクメ

目次

詔書……………	(一)
内閣告諭……………	(一)
世界屋棟的帕米爾……………	(二)
……………	(二)
學内報……………	(七)
卒業式報告「協議員會」がくほう抄	(七)
校友……………	(七)
常議員會「東門部」一同總會「大連支部」 新京支部「齊々哈爾支部」江口、向井兩君 祝賀會「神戸關大法曹會」會員消息	(七)
戰野通信……………	(八)

ン（共和國）における特殊な氣候條件によつて齎された現象である。棉花耕地は一九三六年度二〇萬ヘクタールに達した。農産物の内譯は穀物七〇％棉花二五％、その他種糧樹である。「中略」棉花の産出は、大戦前に比較すると數倍の擴大であり、全聯邦の五％を占める。尙西部では小麦が栽培され中部では米が實る」

前掲書 三四三頁

「秘められたる富源の開發」
「タデツクの河川體系は急速な水流を以て多大の自炭（即ち電力を生産する。既に第一次五年計劃に依つてパツシユ河に一萬三千K・Wの「パフシユトロイ」水力發電所が建設された他、スタリナパツド市（五十K・W）ホドヂェント（八千K・W）シユラブ（一萬八千K・W）にも第二次五年計劃に於いて各々發電所が新設された。」



ルミパ

「工業原料としての資源も豊富である。即ち錫、鉛、五〇萬金屬（鐵、金、マンガン、石炭（ザラフシヤン河畔）を始め硫黃、石油、亜鉛、石灰、岩鹽、石棉、ゼルコーニアム）の如き様々な種類にわたる首府スタリナパツド附近からは可燃燐瓦斯も噴出してゐる。」

「かくて第一次計劃に於いて、キツセルにセメント工場、石油工場、クリヤブに機械工場、セメント工場が組織された外スタリナパツドに大規模な紡織工場製絲工場が數多建設され、タデツク工業も近代の産業化に向つて邁進しつつある。」

前掲書 三四四―四五頁

之等は凡そ從來の自然風景草越のバミール記事に對立して幾多の近代的生産工作が工夫されつゝある事を掲載するものであるが、かくなれば愈々以て此「屋根」に就いて驚異を加はらしめる次第である。

「誰が案出したものなのか」
膨大なるヴィグイアン・ツ・サン・マルタンの佛國地理辭典を探すとこれは又、意外に多大の頁、それも極小の活字で長々とバミールについて説明を加へてゐる。佛國にすれば他洲の山奥の一小地域「かくも驚異に研究」せらるゝと一驚を喫せざるを得ない譯でともかく左に「屋根」の由來の條を摘譯しやう。

「アルプスが個有名詞に擧用されたが如くに當地方の住民「タデツク人は牧草のある高原のみにバミール（カシミール）の如き」の名を冠用してゐるが此タデツク人の家屋の屋根「Kani」完全には「Kani」の状態に由來してゐるのではなからうか。事實はタデ

ツク人の屋根の如くに平たいバミールの高原は偉大なる大屋の屋根として周圍の地から聳えてゐる。此事こそ、歐洲人の好んで用ひる「世界の屋根」なる品質形容詞の出所たるバルシヤ語の「語因である。因みに「バミール」の出所に就き同書は外に多數の説を掲げてゐるが此處では省略する。」

と説明してゐる。

これによると「屋根」や「屋根」の語は常に日本人や支那人だけが好んで用ひるのでなく、歐洲人も實に「そうらしい」事は面白くて、それだけ土地の地貌の質形容に餘程の妥當性を有してゐるらしい事が確められるだらう。其處で問題は「山嶽重疊」だの「屋根」だの修辭的表示にのみ魅了される事の危險を去けて此内に、此修辭がもつ他の意味を引き出す深慮が必要といふ事にならう。即ち同辭典は更に語をつゞけて曰く

「此屋根が相對し、相傾きあつて、しかも其合間を幾多の流水が次から次へと屋根を傳はり其度毎に水星を埒しつゝ住民を喜ばしてゐる。」と。

尤來中央アジアの他の地方では何れも同灌溉に多くの努力を要請せられるがタデツクでは耕地の六十五％の用水は皆降雨に俟つのである。西部バミールの高度の低い諸市邑では夏季三月月に一五M・M―三三M・M年（平均一四一M・M―一五一七M・M）である。山岳地では降雨の重要さは高度と共に考慮すべきで最大は二、五〇〇米―二、七〇〇米の所に著はれるらしいので此處に良牧場が所在する事になる。バミールの本部のバミスキイボストの觀測では僅かに四八M・M（一説には五九M・M）の雨量しかないがこれは明らかにセルデー・タウ山塊が西風を防げるからで他

所では概して、果樹蔬菜、麥類の栽培には充分量を恵まれるから、彼等タヂク人は早くから農耕定着の風を見たのである。次の記事は此状を物語つてゐる。

「彼等は播種に際しても收穫に對しても穀物や菓實や種子を持參して、神聖なる石「マザール」の前にそれ等を擧げて彼等が祖先の神を祭り、尙自然の偉大なる力を讚美するのである。これこそ農耕者の宗教である」

Orient Soviétique, Lydia Haeh 著 1931 版中の一七二頁の譯

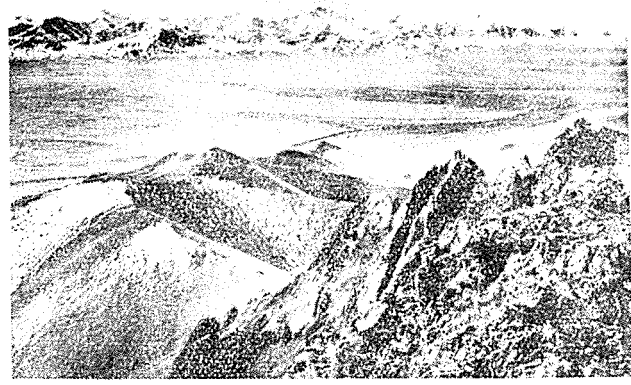
勿論人口全部が農耕といふのじやない。セチエコフ氏の前掲書中に次の如き算定があるがこれは牧畜をも含んでの即ち農牧型の生業態を意味するものと考へねばならぬ。丁度彼のスイスの夫れの如きアルプ型のタヂク共和国 農民 九〇% 都市民 一〇% バタフシヤン共和国 農民 一〇〇%

牧畜が溪間や山腹の耕地の農作と兼併され集産的に營まれるのである。此處で留意すべき點はスイスでもそうだがこんな地理の所では環境と共に自然發生的に共産的にも集散的にも生活が規制されるもので個人主義的唯利目的のみの生活態度は不都合になるのである。然しタヂク人が「革命」を喜んだのは別の事由によるので、又當地方に共産黨が組織されたのは革命共産を謳歌しての話では無いのである。前掲リデア・バツハ氏は次の如く記してゐる。

「イスマエリト(タヂク人)が革命とボカラの王朝の没落を彼等の信教の自由の黎明として、將又彼等に此榮光を齎らすものとして革命なり基朝没落なりを祝した」

「一九二〇年に、ブカラで職位にあつたエミール(スンニート派)は其財や、一族をつれて奥タヂキスタン(即ちパミール)に逃亡した。彼等は赤軍の來寇前にそれとの合戦を避ける工夫をしたし、彼等は革命會議を組織し、地方ソビエットを選出したのである。これが今のバタフシヤン (Tadukhan) である。」 前掲書 一七四頁

これに依ればブカラを逃亡する事と、自ら革命會議を開いた事だが此邊に凡そ、ソビエット式のカラクリが存するのでは無からうか。だがタヂク人に就いて同書は別の所に次の如く記してゐる。



パミール高原

「然し、パミールタヂク人はアガ・カンン(Atkan)に對す忠順を未だ保つてゐる。當地住民は九八・八%迄は尙未だ文盲である。ボルシェビストの影響は此高山地帯への侵入は困難である。此山地には同教の聖者、イシヤンやビル達が彼等の全部の靈の上に勢力を確得してゐる。けれどもソビエットはイスラムに反對では無いと稱しはじめ或未開の村落では「レーニンがアガ・カンの子だ」と語られてゐる。」 同書 一七五頁

こうなると愈々奇怪になつて来る。ロシア通のジャール・ステベ(Charles Steber)氏の近著(一九三九)「ソビエット中央アジアとカザクスタン」(L'Asie Centrale Soviétique et Kazakstan)中の「今日のタヂキスタン」の條に次の様な記事がある。

「アフガニスタンに逃げたエミールは尙一九二〇年迄バスマツチの亂に成功しソビエット工作を妨害したが一九三一年に遂に最後の反亂にイブラヒム・ベクは捕はれた。」

「此事態は南部タヂキスタンの殊に山地の後進性を物語るものでそこでは宗教的偏見、や迷信無智が勢強く、敵意ある外國の好策が有利なのである、それで經濟の集團化がより不如意でもあり遅延した。」 同書 一五七頁

印度の英國政府が西北國境地方住民の支配に手をやく様に此處でもソビエットは住民宣撫に大軍なのであらう。矢張同書に、

「東方民の典型的な共和国(タヂク共和国等を意味する)への變遷は世界に至大の意義を齎らす。人々は一九二〇年前の中央アジアの植民地の性狀を

思はねばならない。すれば奴隷解放の爲の努力の如き可成り偉大のものたるべく、これはやがてアールシヨア國英國の憂懼を物語るものである」

——一五七頁——

當タデキンスの所在が英國勢力と接攘してゐる所から眞實のソビエチズム、乃至は赤色帝國主義の露骨なる工作は論外なので、むしろ一日も早く、

「其後進性（生産上の）と外國干渉による反亂等にも拘はらず其農業の躍進によつてエヂプト棉の大豊をソビエツト聯邦に供する國に程なくなる」

——同 一五八頁——

事こそ願はしいのであらうし要は此植民的原料の提供に問題の重點は懸つてくるのである。左の統計はこれを裏書きするものであらう。

棉花 耕地

戰 前 一七、〇〇〇ヘクタール

一九三四年 二六、〇〇〇ヘクタール

一九三七年 二六、〇〇〇ヘクタール

エヂプト棉耕作地

一九三〇年 三、〇〇〇ヘクタール

一九三四年 三、〇〇〇ヘクタール

——全ソ聯の約四分の一——

——全ソ聯耕地は一〇、五〇〇ヘクタール——

小麥其他の畑作耕地

一九三四年 四六、〇〇〇ヘクタール

一九三七年 七五、〇〇〇ヘクタール

シベリア、ウクライナ等の農耕地を領し乍ら尙此邊疆バミールの山岳地に對して、ソビエツト政權は何を期待するのか。此「棉」以外にそれは經濟資源といふよりは、對英的境界防備工作に外ならぬとせねばならぬ凡そかゝるこれ見よがしの民族對策や、民族解放ゼス

チユアアの正體が如何なるものなるかはこれ又容易に想像しやうがともかくこんな「世界の屋根」とけなされる地帯を見逃さず施策するソ聯の周到なる防禦態勢と侵略工作とを單純に「複雑怪奇」と片付けてはならぬであらう。

俗語は妙に外交訓話的なものに墮したが、本體たるバミールの屋根——その世界的な所へもどさう。

既記の如く此世界の屋根の上にも人間は百三十三萬三千（一九三三年）住んでゐる。一平方キロ七、七人といふ事になる。人口六萬のスタリナバッドをはじめ近代商工の町もある。多少程度の問題だが五千人の土人教師と二五〇五の小學校、一二五、〇〇〇人の小學兒童、二五〇の病院と四百人の醫者もあるし一二、〇〇〇キロの車道も開通してゐると記載されてゐる以上は此草葺「屋根」も仲々に大廈の夫れに變りつゝあるものとせねばならぬ。これ等は現存の住民社會の事柄だが今一つ此屋根にまつわるそしてこれは凡そ我々の想像の限りの古い話がある。

或人種學說に従へば世界の人口の流れも此山中から發源したとしてゐる。つまり人間創生の地なのだ。蓋し四千米五千米六千米何れの高さとしやうとも、現在でも此程の高地では到底生活がなり兼ねるのに昔も昔大昔に人が生れて、生活したとは一寸想像も其限りをつくしてゐると思へる。尤も中央アジアの氣候が代つたし、或ひは此邊の地勢も變つたであらうから其反對論據も成り兼ねる。何だか此「高地を下つて人々は西と東に袂を分つた」等とのローマンズはあり相な心持もしやう程に此「屋根」は世界的な關心と魅力を確かにもつてゐる。彼の謎の人間ジブジの本源も此邊だと

いふ説をウエールズだつたと思ふが世界の文明史中にそんな事を書いてゐる。とまれ、此の人種説によると

「古代にバミールの屋根に直接する近隣の二つの偉大なる人口群があつて、其西方の人口群即ちアリア人はバクトリアヌス *Bactriana* の高地（イランアンガニススタン、トルキスタンの三地方の交點を中心とする或範圍の土地で此バミールの西方延長地帯に相當する）から發祥し西方に移住したのだが（南下せるものアリアン系印度入）此バクトリアヌスの地こそ東の方にバミールを控へる所である。

尙他の一つの集群は支那の説によるものでそれは彼等が其所在を信じた所の中央の帝國の人々で、東トルキスタン、即新疆の南西、に相當する地支那バミールの人々なのである。即黄河の上流に出で来る前の支那祖先人群と想定される人群なのである。次の抜書がそれである。

第七章 我國太古的生物和住民的起原

二、住民之起原 漢族自南方緬甸呢還從北方西伯利亞來呢還是從西方亞細亞來呢或是發生於原地呢這問題殊難解決。當公元一六五四（清順治十七年）基仲爾氏（Kinchur）發表漢族起源於埃及的論調。拉克哈里氏（Laouperic）都說黃帝所率的百姓是巴比倫的、拔庫族、黃帝就是其史所稱的王。李喜登芬氏又說漢族來自土耳其斯坦的利圖。這三說、都是向壁虛造、毫無確證。考徵我們厚有的史籍、漢族初黃河流域後來漸蔓延到河北、甘肅陝西山西河南、和山東西部等處、這一說是爲可信。

中國地理新誌——揚文洵外五名共著

現在のアーリアンヤアジヤ蒙古人等の分布過程を逆
に推進し源泉を探し求めると遂に此人種説の如くに略
なる譯だが、それにしても愈々の發祥點としてパミ
ール世界の屋根はどんなものか。とても彼の生物水邊起
原説と一致しうでは無い。此パミールや葱嶺等以下
の大地が山地の隆起と共に生活不便が加はりそこで
これを遠ざからしめたのかも知れない。そうすると、世
界の屋根」故の人類の分散分布といふ場面になるが眞
偽は其道の人に委す外詮が無い。

日本の屋根の感じはドス黒いがパミールの屋根はど
んな色だらう。中央アジアの沙漠の数々キジルクム
カラクム、カラカルバツク等」を南限する大山系の
總元縮格たるパミールだからどうせ此處にも沙漠性の
所はある。

「クリスマス當日余等はミンタカ・カロールから
支那に於ける最後の野營地であるロツプ・ガツ迄短
距離の行進をした。此時既に余らは少くとも一萬四
千呎の高度に達してゐた。風光は空漠として岩及び
氷の荒涼たる地であつて亞細亞の屋根に恥づかしか
らぬものであつた。」

——一五〇頁——

「余らは塔什蓋爾(タシケル)を二月二十一日に離れた。そ
して五日間は百十哩乃至二十哩進んだ、余等は緩か
に昇つてゐる。平坦なパミール高原を進んだ。ヤル
ギーズ人の野營地であるヤルガル、ダンダル、ペ
ク等に一夜をあかした。各野營毎に其前より漸次少
しづつ高くなり峡谷は狭く、なり雪と氷は段々増し
た。」

タイクマン著 新疆旅行記

——一四八頁——

昭和十四年外務省文化事業部版
これ等の數行によつても沙漠性の内容が稍具體的に
把握し得るだらうが、土地の高度の上昇によつて寒氣
と、地味、風水の不良が地膚を露出せしめるのである
即ち沙漠的性状を呈するのである。

「特に空氣の稀薄は息切れがして夜間に目が醒め
た時一層酷く感じた。けむい粗糲火は天幕内で零度
に迄温度をあげた。」

高度地帯の沙漠性の景觀が躍如として浮び上つて來
る普通の沙漠に對比すれば此處は高地なるが故に必ら
ずや恒雪におゝわれた秀峯が地面のハテを區限つて、
塵埃標霧無き高層氣圈の中では空は憎い迄も紺青であ
らう。事實パミールの各箇所共晴天の日は多いのであ
る。一ヶ年百五十一日百八十日を推算し得る。これは三十一
四千米間の水分凝結高度下の所だからそれ以上の所は
一層晴朗たる陽を眺める事であらう。然し此千古不磨
の雪の冠こそ、下界には貴き無盡の水源なのである。
されば此高山に接する彼等の心根は又格別なものがあ
らう。此特異なる天恵と雖も人界の用には徒手では入
り來らぬ。住民は随分野山に牧養に生活資料獲得の爲
に過激なる勞働を負担せねばならないので殊に女性に
於いては稍もすると體力の補給が止むので生存男女の
對比は男一〇〇に對し女九〇、又幼兒の死亡率も多い
事は一に無智なる親に看取りする充分の暇が無いから
によらう。日本等は

「元氣の方へた此頃では五十歳を越えた者はパミ
ールの高寒の冬季旅行には年齢がよりすぎてゐると
思ふのである。」

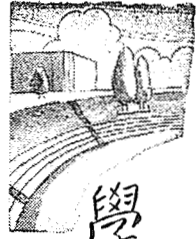
とタイクマンはこぼしてゐる事は土人以上に此地帯居

住に就き歐州文化國人の體力の有限を物語るもので我
國人と雖も體位は此程度のもものでは無からうか。タイ
クマンは一期の旅行者であればかゝる事實も一つの旅
の語り草で済まし得やうが土地に永住する彼等は果し
て如何なるものか。

一年併蓄備一寒さやつかれの一言のみは一行中
唯余のみであつた。パミール高原を往來しつてあ
る二人の蒙古人は少しも珍しい事では無かつた。又
此漢人は總ての漢人、中華民國本部在住のものも併
せての意か」と同様にどの道避け得ない艱難辛苦を
平然たる忍耐方を以て我慢してゐる。」

タイクマン同書 一五一頁

新疆からパミールを経てカシミールと政治使命を負
びて傲岸の氣を以て旅をしつづけたらう英人も此アジ
アの屋根を行く時こそは心秘かにアジア的内陸性の不
可解に思はずも苦情を云ふのは余一人との身の不遜を
省みたのだらう。雄渾壯天の天地自然の大靈の前には
將に平素の主客顛倒して劣等視した支那人、蒙古人の
姿にアジアの神祕を覺つたであらう。總ての漢人同様
に」と皮肉りつゝ、其の避け得ぬ辛苦が何故かと敢えて
對支英國人の態度を偲ぼしめるかの口吻はパミールを
舞臺に立てばこそかくも露骨に出たのであらう。此
アジアの屋根に現實に朝夕の生活をすこす、タヂク
人キルギス人よ。たとへ汝等が白人の頭に、眼に、未
開と後進を暴露し、一度は彼等の足下にふみにじられ
うとも、所謂「平然たる忍耐」は遂に此アジアの屋根
はそこに居る人に「アジア人のアジア」ヨロツパよ
りも偉大なるアジアの天地」を覺らしめる日があらう
アジアの地は今程「平然たる忍耐」を要求さるゝこと
はない。勿論日本でも。



學内報

卒業式豫告

大學部 第十六回 三月十九日午後二時
 千里山學舎
 専門部第一部 第八回 三月十九日午前十時
 同 第二部 第五十二回 天六學舎
 關西甲種商業 第二十五回 三月三日午前十時
 第二商業 第十五回 天六學舎

通常協議員會

昭和十四年度通常協議員會は三月十四日午後五時より中之島新大阪ホテルに於て開催、昭和十三年度歳入出の決算、十五年度豫算等を協議承認せられた。

かくほう抄

△川上教授 文部省囑託東亞聯盟の委囑により中支特に上海南京方面視察の爲三週間の豫定にて来る三月二十三日長崎出帆の長崎丸にて渡支される。
 △森川教授岳父 森川教授岳父大席參之助氏は佐世東市東山の自宅にて靜養中の處、去る三月十五日午前五時逝去せられた、享年七十四

校 友

校友會常議員會

紀元二千六百年記念

校友會館建設に決定

去る二月二十八日午後五時半より校友會常議員會を開催、神戸會長をはじめ、内藤副會長は帝國議會開會中にて上京中であつたが特に歸學出席、常議員三十名中應召者二名、止むを得ざる事故の者もあつたが二十三名、殆ど皆出席とも云へよう、先づ徳島支部設立に付ては會期第二十三條により承認し、次で本日の議案紀元二千六百年記念事業として、校友會館の建設の件に付熱心討議し、満場一致建設の件を可決した。次で發起人の人選は會長に一任し、可及的早く實現の計畫を樹立することゝなつた。

次で六時半より本年卒業の學部學級委員専門部學友會委員幹事の有志を招き懇談會を開催、學生間有志も校友會館の建設に絶大の賛意を表し、種々意見の開陳ありて午後十時散會した。

當日の出席常議員氏名

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 神戸會長 | 内藤 正剛 | 岩崎 那一 | 原田鹿太郎 |
| 春原源太郎 | 潮本 周三 | 織田佐代治 | 桂 忠雄 |
| 河村 宣介 | 榎本 信雄 | 柏元 孝治 | 神尾敷民藏 |
| 武内 富三 | 武田 榮 | 高梨 乙松 | 中村 忠雄 |
| 補田 完治 | 山崎 敬義 | 松本茂三郎 | 松原 藤由 |
| 里見 復二 | 神保 敏男 | 角田好太郎 | |

専門部第一部同窓會

専門部第一部補立せられて十年、其卒業生も既に二千餘名を數ふる時、未だ同窓生相集ひ懇談懇親するの機會もなかりしところ、今般第一回卒業生を以つて結成せられた北斗會を組織的に専門部第一部同窓會として再結成し、其第一回總會を三月十日正午より天六學舎大會議室にて開催した。參集するもの百五十餘名、前主事武田藏之助先生の御出席を得今次聖戦に護國の花と散つた同窓諸氏の英靈の冥福を祈ると共に第一線に活躍中の諸氏の武運長久を祈願し、江原氏議長 寒川氏出征に付代理となり新會則を満場一致承認、次いで顧問武田先生の挨拶あり、左記役員を選出、引續き養食を共にし校友會館建設種々懇談を重ね、午後七時欣快裡に散會す。高卒業生諸氏にして勤務先、現住所移動ある場合速に校友會本部 學報局内 に御一報類し度く次回總會には多數出席せられんことを希望致します。

大連支部

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 寒川 喜一 | 平島 廣 | 江原 文造 | 嶺二 |
| 岡田 博 | 中村 忠夫 | 堀本 周三 | 上田 廣藏 |
| 爲井武一郎 | 巽 鐵太郎 | 山本貞之助 | 藤谷 俊男 |
| 里見 復二 | 緒方 弘 | 菅原 一夫 | 森宗 信一 |
| 金 台三 | 安田 高雄 | 坂本 龍夫 | |

一月二十日午後六時より海務協會に於て秀麗會第四十五回例會を開催す。

今回は出席常連組の飯田室山の兩氏が差支へのため姿を見せなかつたことは一抹の淋さを投げたが、然し久しく奉天に本據を置き活躍中の株式會社晃洋行取締役社長川野勳平氏並に當地滿蒙殖産に新任の白石正義君の來席ありて、或る力強さを吾々に與へられた、例會はいつものながら和氣霽々、語る處盡るなく樂しむ處限りなき爲態、實に愉快そのものに盡きる、物價昂騰で、細くなつた料理、薄くなつた酒にも何等不満もなく、團樂の雰圍氣に包まれ、一同起立學歌を高唱し別室に移り圓卓を圍み、膝突合せて清談を交はす、木村光頭氏の懽懽琵琶の一席あり、更に内地の景氣話あり金缺性の心臓を衝くこと烈しく次で高濱居士の和歌の講義があり、難しい話はいつの間にか居士の税關時代の逸話に誘導されて、快笑の續出となる、更に自稱五段の劍道の談に入り並居る一同難倒されんばかりの態當夜は特に愉快なる清談が多くて、お互ひは一ヶ月間の塵芥を拭ひ去つた様な心境に立到り名殘惜しくも午後九時四十分散會す。當日の出席者

- 高濱 直一 木村 儀八 川野 勳平 伊達 弘
 秀島 全治 岩本忠三郎 加來 茂彦 結城 丙太
 萩原 博 白石 正義 池内 輝一 北條 茂義
 平井 三朗

入 醫 者 壯 行 會

國際運輸連雲港出張所にはしばらく在勤中の安達君七君が、明日渡内地に出發すると一月二十七日歸連したので、早速當夜午後六時より壯行會を出縣通サツポロに於て開く、事急にして全校友に通知する餘裕のな

かたことは残念であつたが八名の校友が集まり安達君を圍み激勵し、自重と武運長久を祈り、しばしの名殘を惜しむ。

平井君の壯行の辭に對し安達君氣概ある男子の決意を述べて吾々に強き感銘を與へた。

集まれる校友が、赤誠を籠めて自署したる記念の日章旗を拍手裡に安達君に贈り、同君の萬歳を絶叫し午後九時半壯行會を閉づ。



(號月二誌本細詳) 影 撮 念 記 の 式 會 餐 部 支 島 德

當日の出席者

- 主賓 安達 竹七君
 校友 木村 儀八 室山宇太郎 秀島 全治
 結城 丙太 北條 茂義 武笠 幹雄
 貴村 一雄 平井 三朗

新 京 支 部

一月二十七日大興ビル青葉グレルで第八回國都例會を開催する、新年の挨拶から先づ開會、今回は殊に電々の奉天管理局より新京電々本社に轉勤になつた杉山君の出席を得、光井、福井兩校友を失ひ一抹の淋しさを覺えた矢先であり、大いに力強くも愉快さを感じた今夜は研究發表の講師は未決定だったが、期待した北支より歸還早々の大山建大教授の御出席を得たので早速視察談を御願ひする。

北京より大同、包頭の方まで足を延ばされた教授の現地報告は現在北支那に於ける政治的動向、治安等高所より觀察された遠見と俟つて我々に深い感銘を覺えさせた。

北支那の動きは日本政局の政治的動きであり、寧々の動きでもある歐米の先進國が植民政策を採つたのは何世紀頃であつたか、我々の進む興亞の聖業聖戰の前に如何なるものが立障かつてあるか、ドルは、法幣は武力戰に次ぐ經濟は、一つ／＼克明に盡き出される我々の知らざる局面に激憤の覺えざるものはなかつた。

現在嚴寒の新京に石炭の不足が歎かれてゐる、教授は聖戰の前に、我々の口にす可き事がらでない、と云はれる、苦痛、悲哀不自由が身にせまらなければ非常時

の國家狀勢が認識されぬとなれば情無話しだ、祖國は輝ける皇紀二千六百年を迎へ興亞の道に邁進しつゝあり、身に餘る千載一遇とも云可き御世に我々が困苦缺乏の生活に堪へ得るこそ、世界の一等民族としての勝利を得るの時代では無いだらうか、北支那の政治的動向より建國の情動もすれば薄きつゝあると云はれる滿洲國官吏に建國當時のあの英雄的な情熱を滿洲國官吏の中から除外して見よと警告された、教授の視察談から次ぎ／＼に憂國の情迸り出た第八回一月例会は實に有意義な稀に見る興奮した例会であつた、

講演の中途昨年十月の校友會評議員會で教授が、校友會推薦會員に推された、神戸學長よりの親書を披露する。

例會出席者はまだ／＼數に満たぬのを歎かれるが、例會開催が決して無意義でないことは、今宵の例會出席者の同じ感銘された事がらだと信ずる、嘘と思ふ者はどし／＼出席してみることだ、午後九時名物のそばを啜り閉店の時間を合圖に又一ヶ月後の再會を約して閉會した。

出席者

- 大山建大教授 今村 茂 藤田 藤一 岩崎 繁男
- 杉山 弘 三宅 良孝 志岐 五六 佐藤 丈夫

齊部哈爾支部

北滿の國策第一線に活躍する校友の固き團結を標榜し、一糸亂れぬ結束の下に輝しき紀元二千六百年戦勝の新春を迎へ、更に精神的な激動と慰安を共にし、將來への大いなる飛躍に備へて關西私學の名譽ある傳統を誇る齊々哈爾支部では、北滿の特殊性に鑑み附屬商

業をも包含するオール關大學關係者の大校友會たらしむべく企圖し、會て學園に在籍せるものも喜んで會員に包擁することに方針を定め、その結果新に數人の有力なる人士を會員に加へて二月例会を九日午後七時から厚德福飯店で開催した。この會に出席のため村上支部長も北安省克山からわざわざ出て來られた。母校の最近の狀況、恩師、舊友の話が出て村上氏は洪水の澤山勝氏（本年二月應召出征、大日本奉法會長）を語り話はずんで昔懐しく追憶に耽つた。

尙席上崎谷庶務幹事（滿洲國通信社勤務）は任期満了でもあり、近來會社業務多忙のためこの機會に一應辭任方申出あり、承認して後任に村松會計幹事（警察廳經理股勤務）を推し、會計幹事には新に梅林氏（光武商店勤務）を指名した。

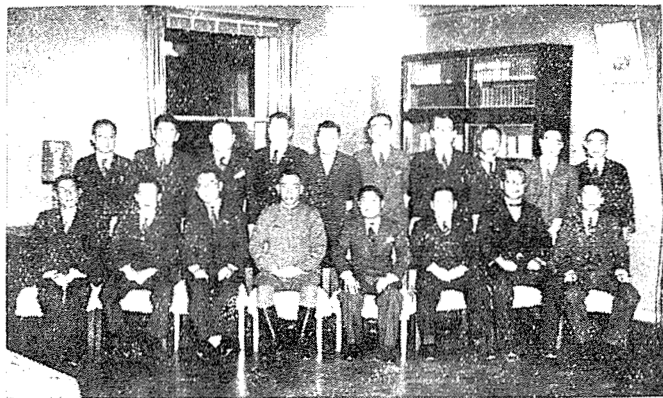
尙二月現在の會員氏名は

- 支部長 村上伊三雄（北安警察學校）
 - 庶務幹事 崎谷 三郎（滿洲國通信社）
 - 會計幹事 村松 至（警察廳經理股）
 - 半田 誠治（大二公司） 森直 行（女子國高）
 - 美岡 武夫（第三國高） 山口 實美（協和會市本部）
 - 武田 裕（商工会） 渡邊 俊彦（黑龍江民報社）
 - 梅林 馨（光武商店）
- 事務所は齊々哈爾市豐恒胡同一號滿洲國通信社支局
崎谷 三郎氏方

大正十三年卒業

江口 透君 祝賀會
向井重太郎君 歸朝

支那事變勃發間もなく應召された江口透君は中支の



會賀祝君兩井向、口江

戦線に於て工兵隊長として〇〇に於ける敵前上陸はじめ常に第一線に活躍して赫々たる武功を樹て、中尉に昇進この程凱旋され、又學友向井重太郎君は平林商店フランス出張所長として滯佛八年我國獨自の工藝美術の粹を彼地に宣傳して去る一月下旬歸朝せられたるを以て、兩君の歡迎祝賀會を去る二月二十四日午後六時より宇治電ビル九階クラブ別室に於て開催した。集るもの主賓の江口、向井の兩君をはじめ、畑孝二郎君（板谷生命大阪支店長） 蜷木茂驥君（安田銀行） 頓戸勇（政

友會大阪支部書記長)玉置轉留男君(夕刊大阪社會部長)田中八藏君(引拔鋼管製造)壺田倫夫君(貝塚實業專修學校長)中山幸市君(日本電建會社專務)名倉熊藏君(荒川商店)松本晃君(滿洲炭礦會社)小西直意君(江商會社)坂口軍司君(熔接聯合組合事務長)佐津間秋夫君(松本鑄造所)霜村盛郷君(小倉坂口商店代表)森川太郎君(母校教授)並に學報局神屋敷君の諸氏にて、江口君の武勳談並に向井君の現時の歐洲の情勢を聞き、又母校の現状と懷舊談に耽つて甚だ有意義なる會合であつた。尙今後は頼戸君を幹事に煩して時々かゝる會合を催すことに申し合せ午後十時散會した。

神戸關大法曹會

久し振りに日毛ビル食堂で會合をはかつたが、三月一日興亞奉公日と競合してか、缺席者が多かつたのは己むを得ない。當日の出席者

裁判所からは大塚判事
公證人では山崎氏
計理士では奥田氏
辨理士では角田氏

辯護士連では原田、石橋、瀧、大白、長島、水本氏右の如く代表的な強力スタツンを、一場に聚めて會談は盡きない。母校も成長したらしいが、我が關大法曹會の存在は、何んと云つても屬港法曹會特異の存在である。殊に辯護士會のミットグリードは誠に會長一人副會長五人と現在の副會長二名迄が關大出で占めて居ることは、僅々二十數人の内から、此くも見事に抜けるものだと思はれる。此くて當日は益々協調と交馳の

機會を強く、不斷ならしめたいとの歸結を見出し、早春の夜に母校を校友の一大連繫の密度を、加へ度い事を語り合ひ散會した。何れ屬港校友會の一大勢力が結成せられる日も近かるべく帝大、慶應、早稲田等先進飛躍の各校友グルツベに、勝るとも劣らない、自信の持てる優秀な關大校友會が黎明に出るだらう。

會 員 消 息

天宅 俊治君(天一大政) 警部、大阪府警察部特高課
勞働係より特高課檢閱係長轉任
赤井 末政君(昭六 大法) 大連機械製作所を退社、目下布施市近江堂四四に歸省
有藤 立生君(昭六 專法) 滿洲電々會社洮南電報電話局長より奉天中央電報局受配課長に轉任
五十川直市君(天十一專法) 辯護士、縣會議員、事務所は神戸驛前ビル(電元町四三八八) 自宅は神戸市灘區鹿ノ下通三ノ三五(電御影三六三一)
伊藤 新治君(昭三 大法) 警部、大阪府警察部經濟保安課主任より木津川警察署長に轉任
飯森 徳秀君(昭六專三法) 北支の第一線より部隊と共に原隊に歸還、主計中尉として朝鮮大田府歩兵第八十聯隊第三大隊に在營
池田彌一右衛門君(昭九專一商) 神戸銀行大阪支店に勤務 藤糺君(天八 專法) 在學時代學生相撲界のナンバー・ワンとして關大のため萬丈の氣を吐いた氏は現在廣島瓦斯電氣會社庶務課長として腕を揮はれてゐる。
大隈 末廣君(天二專法) この程辯護士を開業、事務所は西區西長堀南通二ノ二〇中村公男方、自宅は

戰 野 通 信

専門部教練課少尉 久保田作平

拜復一月十六日附御芳墨二月十七日難有拜見仕候
教職員各位益御健勝にて御奮闘の由奉慶賀候、降而小生事御蔭様にて頑健にて繁務の中愉快なる奉公罷在候間御休心被下度候

當地は一月中旬以來曇天多く小雨あり、所謂雨期にて小寒く厭な天候、折に晴天あれば彼岸頃の桃の花でも開きさうな暖かさで大陸の氣候は寒心に御座候、先日迄は第一線の生活にて終始彈丸の音を耳に致し働き甲斐ある生活を致し候處電氣のある市内に参り色々複雑な生活を致し居候、宜撫も着々と進み土民も安業樂土の境地に生活を致し居候て日支の親和も相當にて興亞のため結構にて、南郷大尉が華と散られた南郷村も程近くに有之候、學校も學年末にて卒業及終末試験で皆様御苦勞の事と存上候、石川大尉(關甲教諭)護國の神となられた事學報で承知仕り誠に感慨無量に有之候、神吉君(教務課勤務)も五六丁の處に居り近日中に會ふ考に御座候、袋井氏(准尉専門部教練課)も大元氣で第一線に苦闘を續けられ通信致し居候者君(少尉専門部教練課)よりも時々便り有之、可野氏(大尉専門部學生課主任)は半年位通信無之御無事と拜察仕り候(後略) 一五、一一、一八

磯 茂 夫 (專三法三在學)

お蔭様で達者にて〇〇警備の大任についてあります
お守を手きぐりて見る夜寒かな

住吉區北田邊町二五八

築川 喜一君(昭八專一法) 二月末應召勇躍征途につか
る

片岡 宏君(昭九 大政) 警部補、南河内郡黒山署よ
り吹田省へ轉勤

神田 孝助君(昭十一專一法) 日本歐阿近東輸出入組合聯
合會並に日本綿絲布歐阿近東輸出組合を離し、今
般淺野物産會社に入社、大阪支店に勤務

川手 輝典君(昭十四大法) わが國陸上競技界の至寶、
名スプリンターとして將來を囑望されてゐたが、
近衛歩兵第一中隊に入營、富士襪野陸軍演習場瀧
ヶ原廠舎に宿營演習中、本月十日午後二時跳彈の
ため頭部に貫通銃創をうけ即死さる。遺族は山口
縣大津郡深川町正明市(父) 川手塘太氏

北田 康民君(大十四專法) 警部、大阪島之内署より地
黃署長に轉任

木藤 安之君(昭十專二經) 大阪鐵工所因島工場より大
阪本社資材課に轉勤、住所は此花區秀野町二九、
前川鉞次郎方

清水 萬次君(大三 專法) 警視廳西神田警察署長より
坂本警察署長に轉勤、官舎は東京市下谷區金杉二
丁目一六ノ一、
霜村 盛郷君(昭四 專商) 中河内郡三野郷村玉井一四
八に轉居

柴田 久美君(昭十四大經) 小倉北方歩兵第十四聯隊
第七中隊四班に入營
砂野 隆君(昭七 大法) 大連市東公園町六六、中華

航空會社大連出張所に轉勤

杉山 昊君(昭九 大法) 奉天電々會社より新京電務
本社規畫課電話係に轉勤、現住は新京義和胡同五
〇二電々社宅四〇ノ二

梶原 定治君(昭九專二法) 新京地方法院より哈爾濱地
方檢察廳へ轉任

高木 敏夫君(大八 專法) 辯護士を開業し法曹界に活
躍されてゐたが去る二月十六日逝去さる。遺族は
大軌沿線額田山莊(男) 高木一良氏

竹谷 讓貴君(昭六十四專法) 警部に任ぜられ、福島署より
築港署へ轉任

高見 三郎君(昭四 專法) 鹿兒島縣職業課長より、軍
事保護院事務官に轉任、住所は東京市澁橋區諏訪
町六五

鳥羽源四郎君(昭四五專法) 布施市助役より今般布施市
長に選任された。
中島 平吉君(昭二 大經) 警部、大阪木津川水上署長
より茨木署長に轉任

高級團體專門



二十段家書

大阪府大阪市浪速區堂筋
三七四四號電話



今日より願ひなみ大君の魂の御ご
出立は善く日本を以て兵隊に相成候
講洲公領主口部隊高隊石
澤田雅好(昭十四專四國)

田 章 治 (昭十三專二商)

這般〇〇方面奥地に於ける討伐中不幸病を得、病床
に呻吟致し居候、去年ノモハン事件出動中の過勞に起
因して居る事とて大した日子も要せぬ事と自ら慰め、
一日も早く再び銃を執り國境の警備に馳せ參じ度く待
ちこがれ居り候(下略)

矢野 六 郎 (昭十三專一商)

(前略) 戦野にて拜見する學報は又感じ大いに新し
く、樂しかつた學生時代の思ひ出を何度も繰返して拜
見して居ります。小林部隊長殿はじめ諸教官の活躍ぶ
りも拜見出来てよこんでゐます。
應召以來お蔭様にて元氣にやつてゐます、色々と内
地からの慰問に感激して、亦責任の大きいにも大い
に感じてゐる次第です。過日〇〇の爲め或方面に出動

生 徒 募 集

募 集 人 員

第一學年 約二〇〇名

願 書 受 付

第一期 三月一日ヨリ同十九日マデ

第二期 三月一日ヨリ同二十六日マデ

大阪市東淀川區長柄中通二

關 西 甲 種 商 業 學 校

電 堀 川 一 五 六 〇 番

入 學 考 査

第一期 三月二十日 (人物考査)

二十二日 (人物考査、身體檢査)

二十三日 (人物考査、身體檢査)

第二期 三月二十七日 (人物考査)

二十八日 (人物考査、身體檢査)

二十九日 (人物考査、身體檢査)

(入學案内呈)

募 集 人 員

第一學年 (高小卒) 四學級 約三〇〇名

出 願 期 限

二月十二日ヨリ三月二十二日マデ

日曜祭日ヲ除キ午後四時ヨリ同六時マデ受付

大阪市東淀川區長柄中通二

關 西 大 學 第 二 商 業 學 校

電 堀 川 一 五 六 〇 番

入 學 考 査 (人物考査、體格檢査)

三月二十三日 (土) 午後五時ヨリ

又ハ 三月二十四日 (日) 午前九時ヨリ

本 校 の 特 色

▽夜間甲種商業・修業年限四ヶ年

▽上級學校入學連絡(關西大學豫科及專門部無試験入學ノ特典アリ)

(入學案内呈)

關西大學學生募集

大學部

出願期間 二月一日ヨリ三月三十日迄
 試驗期日 四月一日
 法文學部——法律學科、政治學科
 經濟學部——哲學科、英文學科
 經濟學科、商業學科

大學豫科

出願期間 二月一日ヨリ四月二日迄
 試驗期日 四月四日・五日
 第一豫科 (三年制)
 第二豫科 (二年制)

專門部

出願期間 第一部 三月一日ヨリ三月二十七日迄
 第二部 三月一日ヨリ三月三十日迄
 試驗期日 第一部 四月二日・三日
 第二部 四月七日
 第一部 (夜) 法律學科、經濟學科、商業學科
 第二部 (夜) 法律學科、經濟學科、商業學科
(商業學科ハ高等商業學科ニ變更ノ可申請中)
 國語漢文專攻科、英語專攻科

學則送呈 (郵券三錢)

豫科、學部ハ千里山學會庶務課()
 專門部ハ天六學會庶務課()

大阪市外千里山(電吹田一三番) **千里山學舍** 學部・豫科

大阪市東區長柄中通(電堀川一〇三九番) **天六學舍** 專門部